

北きた白しら川かはは銀閣寺ぎんかくじの北なり、里の名にして、川は民家の中を西へ流る、是なん名所さんしらかは三白川さんしらかはの其一なり。

後拾あつまち 東路あつまちの人にとはゞやしら川の関にもかくや花は匂ふと 民部卿長家

詞花 白川しらかはの春の梢を見渡せば松こそ花の絶間なりけれ 俊頼

新後撰 秋の夜の月も猶こそ澄まされ世々にかはらぬ白川しらかはの水 為教

此里は都より近江あふみの志賀坂本しがさかもとへの往還なり、志賀山越しがのやまこえといふ。素性法師そせいほふしが君が代までの名こそありけりとつらねし、白川しらかはの瀧は道の傍にありて日陰を晒し、川の半に橋ありてはじめは右手に見し流もいつとなく弓手になりて、谷の水音漸瀝として深山がくれの花を見、岩はしる流清くすみて皎潔たる月の影闇しく、橋のほとりに牛石といふあり、形は牛の臥たるに似たり。是よりひがしの山中の里あり。比叡ひえいの無動寺むどうじへは此村はづれの細道より北に入る、右のかたの一家には川水を笕にとりて水車めぐる。

志賀しがの山越やまこえにて、石井いしひのもとにて物いひける人の別けるをりによめる

古 今 むすぶての雫ににぐる山の井のあかでも人に別ぬるかな 貫之

志賀しがの山越やまこえにて

同 山河に風のかけたるしがらみは流もあへぬ紅葉なりけり 春道列樹

山中峠やまなかたうげは白川しらかはの里より一里半東にして、山城近江やましるあふみの堺なり。むかし長良ながらの山桜と詠しは此峰みつゞきなり。三井寺みみでらの入相

の鐘は志がのうら風に誘れ、琵琶湖びはこの風景一眼中に尽て、地勢穆々として心を奪はるゝに似たり。